

階層

2024. 2. 19

福島で生きてみると、世の中の階級や階層というものを意識することはない。だが、今までの人生の中で、社会には階級や階層があるということを認識させられたことはある。

イタリアにいたときだった。現地の人から、イタリアは階級社会だと教えられた。見る人を見ると、あの人は貴族だとわかるというのである。フェラーリに乗っているような人たちか。結局、私には見分けがつかなかった。

あるとき、スペインに行った。マイルが貯まっていたため、もうこんなチャンスは二度とないだろうと、五つ星の高級ホテルに泊まることにした。フロントに行った。片言の英語でチェックインをした。あからさまに見下されていた。小さな子どもを連れた東洋人夫妻である。あなたたちが来るようなところではないよ。そう言われているような気がした。

歴史と風格を感じさせる豪華なつくりだった。ホテル内を見学した。立派なソファに腰を下ろした。どうにもこうにも落ち着かない。場違いなのである。分不相応である。居心地がわるい。それでも、最初で最後だと思い、ホテルライフを満喫した。だが、記憶に残っているのは、フロントでの対応と、落ち着かなさである。

こういったことは、高級レストランなどでも起きる。まだ若かった頃、家人と一流ホテルに宿泊し、レストランでディナーをとった。それまで、ワインなどほとんど飲んだことはなかった。背伸びをして、ワインをオーダーした。感じのわるいソムリエがやってきた。こちらは、慣れずにどぎまぎしている。それをあざ笑うかのような対応だった。ここでも、居心地がわるかった。食事を楽しむこととは程遠かった。

五つ星ホテルも高級レストランも、社会勉強にはなった。だが、ホテルのフロントもレストランのソムリエも、果たして本当のプロなのだろうか。お客さんを気持ちよくさせるのが、本当のプロであり、それが仕事なのではなからうか。

人は、自分よりも下の人間を見つけたがる傾向がある。本来は、人に上も下もない。だが、世の中には、厳然とした階級や階層が存在する。それを肯定しようとは思わない。きっと、一部の人間には必要なのであろう。人は、できる限り上にいたいのである。優越感に浸りたいのである。それが、エネルギーとなることもある。

今では、人生経験を踏んできたせいか、高級ホテルやレストランでも、楽しむことはできないかもしれないが、それなりにはふるまえそうな気がする。だが、相変わらず居心地はよくないだろう。やはり、人には分というものがあり、分相応がいいのかもしれない。

いまだに、あのときのフロントマンの顔と、ソムリエの顔が浮かんでくる。よほど根にもっているということだろうか。いや違う。私に世の中というものを教えてくれた先生だからであろう。そう思いたい。